

Savin's

2022.11.15

全体構成

1 プロローグ 鎌倉の魅力一定説と異聞

2 なぜ由比ヶ浜か

- ・由比ヶ浜の歴史と背景①～⑥
- ・鶴岡八幡宮・段葛と由比ヶ浜
- ・頼朝以前（鎌倉郡衙、由比八幡、源義朝の館）
- ・由比ヶ浜が旧鎌倉地区において重要なエリアであること

3 今海浜ホテル跡地 1.7ha の土地があること

- ・経緯 海浜ホテル消失後
- ・現状 直近の状況（軽く）
- ・この土地が稀有であること

4 ホール（文化施設）建設が望まれる理由

- ・鎌倉には、所謂音楽ホールがないこと
- ・著名な音楽家・芸術家は多く居住（その卵やアマチュアは数知れず）
しているが、集い発信できるセンターがないこと
- ・社寺仏閣や伝統芸能などの歴史的な文化は残っているものの、何れも単発であり
ネットワーク化されていないこと
- ・鎌倉の長い歴史と多様な文化を「束ねる」施設の必要性
- ・そして未来に向けた可能性の創造へ

- ・もし音楽ホールを創るという夢があるのなら、
それを実現するには最も適した場所の一つであること

1 鎌倉～概史と異聞

鎌倉は、北部を骨格となる丘陵地に囲まれ、南部が海に面する天然要害の地であったこと、古東海道が通っていたことなどにより、征夷大將軍となった源頼朝が幕府を開き、日本の政治・経済・文化の中心地として約 150 年にわたって繁栄し、その後 19 世紀中頃まで続く武家政権の基盤が築かれ、寺社や交通路などの都市構造が整備されたというのが定説となっており、専ら鎌倉というと、この大河ドラマ等で好んでとり上げられる部分のみにスポットが当たるのが常である。

鎌倉幕府の衰退後、江戸期には庶民階級の間で参詣や遊山（観光）が普及すると、鎌倉は多くの社寺がある名所として観光客が訪れるようになり、現在に通ずる観光地としてのイメージが確立されていく。明治維新後に欧米文化が流入すると、海水浴ができる療養・保養地としても注目を集め、官営鉄道（現・JR 横須賀線）や江之島電気鉄道（現・江ノ島電鉄）が開通すると、交通利便性が向上した鎌倉には、華族、富裕層らが次々と別荘を構えるようになった。その代表的な存在が明治天皇の 2 人の皇女のための「鎌倉御用邸」で、「鎌倉駅」に近い「鎌倉市立御成小学校」がある場所に建てられていた。豊かな自然や文化的な環境を求めて作家や画家も移り住むようになり、「関東大震災」以降は被害の大きかった東京からさらに文士が流入し、文壇を形成、いつしか「鎌倉文士」と呼ばれるようになった。戦後、昭和 30 年代後半から始まった首都圏への人口集中の影響を受け急激な都市化が進行し、宅地開発の波は鶴岡八幡宮の裏山まで迫ったが、これを阻止しようとする市民運動から発した古都保存法の制定によって阻まれ、以降も枢要な部分となる旧鎌倉地域の歴史的風土の保存や周辺の無秩序な市街地化の防止が図られてきた。

このように、一般に流布している鎌倉とは、「頼朝以降」である。しかし、現市役所隣にある御成小学校（後述）の敷地からは、奈良時代の郡衙の遺構や「天平五年」の銘をもつ木簡が見つかり、『吾妻鏡』の記述とは異なる鎌倉の姿、地域の要衝としての一面が明らかになっている。また伊勢神宮の文書を集めた『天養記』には、頼朝の父義朝が館を構えていたことが記されており、頼朝以前の鎌倉の姿を伝えている。

これらのことから、鎌倉は開幕以前は名もない東国の一寒村だったのではなく、古より人々を引き付ける「何か」があったようにうかがえる。

2 鎌倉・由比ヶ浜寸描

- ①頼朝政権の誕生と鶴岡八幡宮の建立 ②由比ヶ浜縁起 ③由比ヶ浜近代少史
- ④原三溪と建築家ジョサイア・コンドル ⑤磯野長蔵の革新的アイデア ⑥戦後のホテル消失

0 はじめに～「この土地」について

これからお話しする古都鎌倉の南に位置する由比ヶ浜海岸にほど近い1.7haの「この土地」は、おそらくはわが国の歴史においてとりわけ稀有でありかつ奇跡的な存在である。

この土地は、特にここ10年あまりの間、幾多の波にのまれながらも更地としてその姿を保っている。今後どうなっていくのか誰にもわからないが、この土地の真の価値を知る人々は皆その価値にふさわしい利用がされることを強く望んでいる。また、もし土地自身に何かの意思があるのだとしたら、その土地自らもそれを望んでいる、そう思えるような奇跡的な出来事が起こっている。

この事実をまじかで目撃してきた我々は、「この土地」が発する声を望まれる未来へつなげたいと考え、その思いを届けるため今日この機会に臨んでいる。

「この土地」の声を聴き、何かを感じてもらえれば幸いである。

I 古都鎌倉～概史と異聞

鎌倉は、北部を骨格となる丘陵地に囲まれ、南部が海に面する天然要害の地であったこと、古東海道が通っていたことなどにより、征夷大將軍となった源頼朝が幕府を開き、日本の政治・経済・文化の中心地として約150年にわたって繁栄し、その後19世紀中頃まで続く武家政権の基盤が築かれ、寺社や交通路などの都市構造が整備されたというのが定説となっており、専ら鎌倉というと、この大河ドラマ等で好んでとり上げられる部分のみにスポットが当たるのが常である。

その後の歴史についても、一般的には以下のようなものであろう。

鎌倉幕府の衰退後、江戸期には庶民階級の間で参詣や遊山（観光）が普及すると、鎌倉は多くの社寺がある名所として観光客が訪れるようになり、現在に通ずる観光地としてのイメージが確立されていく。明治維新後に欧米文化が流入すると、海水浴ができる療養・保養地としても注目を集め、官営鉄道（現・JR横須賀線）や江之島電気鉄道（現・江ノ島電鉄）が開通すると、交通利便性が向上した鎌倉には、華族、富裕層らが次々と別荘を構えるようになった。その代表的な存在が明治天皇の2人の皇女のための「鎌倉御用邸」で、「鎌倉駅」に近い「鎌倉市立御成小学校」がある場所に建てられていた。豊かな自然や文化的な環境を求めて作家や画家も移り住むようになり、「関東大震災」以降は被害の大きかった東京からさらに文士が流入し、文壇を形成、いつしか「鎌倉文士」と呼ばれるようになった。戦後、昭和30年代後半から始まった首都圏への人口集中の影響を受け急激な都市化が進行し、宅地開発の波は鶴岡八幡宮の裏山まで迫ったが、これを阻止しようとする市民運動から発した古都保存法の制定によって阻まれ、以降も枢要な部分となる旧鎌倉地域の歴史的風土の保存や周辺の無秩序な市街地化の防止が図られてきた。

このように、一般に流布している鎌倉とは、「頼朝以降」である。しかし、現市役所隣にある御成小学校（後述）の敷地からは、奈良時代の郡衙の遺構や「天平五年」の銘をもつ木簡が見つかり、『吾妻鏡』の記述とは異なる鎌倉の姿、地域の要衝としての一面が明らかになっている。また伊勢神宮の文書を集めた『天養記』には、頼朝の父義朝が館を構えていたことが記されており、頼朝以前の鎌倉の姿を伝えている。

鎌倉は開幕以前は名もない東国の一寒村だったのではなく、古より人々を引き付ける「何か」があった。

II 由比ヶ浜～歴史と価値、そして「この土地」

1 鎌倉・由比ヶ浜寸描

(1) 頼朝政権の誕生と鶴岡八幡宮の建立

さて、頼朝の都市造りは鶴岡八幡宮を象徴的な頂点として、南の海岸線、由比ヶ浜に向かって一直線の若宮大路を構築することから始まった。しかもこの大路は、由比ヶ浜から八幡宮に向かって、海側はやや広く、八幡宮に向かって先細の道路計画を作り、いわゆる遠近法による基幹道路の視覚的威容を世に知らしめたのであった。また八幡宮の南側の東西には、若宮大路の両側同様、NHKの連続ドラマ、「鎌倉殿の十三人」の主人公達の居宅が並んでいた。

(2) 由比ヶ浜縁起

由比ヶ浜は稲村ヶ崎から材木座までの、およそ3, 2キロにわたる海岸線の総称である。この地は小笠懸けや流鏑馬（やぶさめ）、犬追い物などの武芸の修練場でもあったという。やがて浜の名は周辺地の町名となり、現在は由比ヶ浜一丁目から四丁目まであり、本テーマとなるこの土地は、由比ヶ浜四丁目、国道134号に面した市立海浜公園越しに、海岸線を一望できる格好のロケーションにある。中世3大紀行文の一つ、「海道記」によれば、由比ヶ浜を描写して曰く「商人百族にぎはひ、…数百艘の船ども、綱をくさりて」と著わされている。また「十六夜日記」を著わした阿仏尼は、遺産相続に関する訴えを上申するために鎌倉を訪れ、極楽寺に滞在中の感興を次のように述べている。「浦ちかきふもとにて、…のどかにすごくて浪の音松の風たえず」と。開幕時の鎌倉は武者の府ではあったのだが、やがて禅宗の普及と共に、詩歌や美術の感興にふさわしい街の文化、その表情をまとっていくのである。

(3) 由比ヶ浜近代小史

明治期に入ると、オランダ医学を学んだ大村藩の医家長与専斎（作家長与善郎の父）は、岩倉具視が率いる渡欧使節団に加わり、西欧各国の診療衛生事情を視察した後に、由比ヶ浜がサナトリウムに格好の地であることを思い起こした。そして明治17年（1884）、由比ヶ浜の松林の中に「海浜保養院」を設立する。実は由比ヶ浜の「海水浴場開き」もこの年が始まりであった。

専齋は気候温暖な由比ヶ浜の地は肺病治療の為の海水浴、即ち「潮湯治」に格好の地であるとして、毎日決められた時間に海に入る療法を推奨したという。遠浅の由比ヶ浜の海水浴は評判を呼び、瞬く間に単なる療法の適地から、レジャー向けの海岸へと評価されていくようになる。

その後由比ヶ浜の穏やかな海岸線地域は、明治22年(1889)横須賀線が開通し、鎌倉駅が誕生すると保養地、別荘地としても注目を集めるようになる。当地の風光温暖な気候を愛でて、横浜在の富商たちがこぞって別荘を構えるようになっていった。

明治35年(1902)には江ノ島電鉄が藤沢まで開通、交通の便も格段によくなり、武者小路実篤、有島武郎、与謝野鉄幹・晶子、吉屋信子、永井路子、高村光太郎、芥川龍之介、久米正雄、長与善郎、野村胡堂、大佛次郎、大岡昇平、吉野秀雄、川端康成、今日出海、中村光夫、中原中也、立原正秋など数多の文人がその居をこの地に定めたことはつとに名高い。戦時中には、作家達は蔵書を持ち寄って「鎌倉文庫」を作り、本の貸し出しを行ってみたり、戦後の昭和21年には新たな時代の教育を目指した「鎌倉アカデミア」を創設するなど、その活動領域は創作活動に留まらずに鎌倉文化の一翼を担っていた。

(4) 原三溪と建築家ジョサイア・コンドル

横浜の名勝、三溪園を造った貿易商、原三溪(本名原富太郎)は上述の海浜保養院を買収して20室のホテルへと改造している。原は生糸を生業として財をなしたが、その後世界遺産に登録された富岡製糸場の経営、初代横浜銀行の頭取を務めた明治時代を代表する実業家である。彼は貿易業を進めていく中で、西洋化に走る当時の世相や風潮、吹き荒れていた神道国教化政策に疑問を抱いていた。原は我が国伝来の建築にも造詣が深く、紀伊徳川家の臨春閣や春日局の茶室、聡明閣などの重要文化財12棟を三溪園に移設をするのであるが、片やでは画家の横山大観や前田青邨をこの三溪園に長期滞在をさせて、彼らの画業を厚くサポートしたことで知られている。この慧眼の主が鎌倉を評価し、注目をした事実や、横須賀線が延伸して大船―横須賀間が開通したことにより、鎌倉の発展が一気に加速していくのである。

由比ヶ浜にあるこのホテルの評判を聞きつけてこの地を訪れたのは、明治政府に招聘された政府顧問の外国人や貿易商、芸術家、政財界人、華族、海軍将校達であった。

さらにホテルは、明治29年に政府が招聘したイギリス人建築家、ジョサイア・コンドルによる設計で、大改築、改造が施されることになる。評価がいや増したこのホテルには、やがて外国人を交えた出資者が集い、明治40年になると、その名を「鎌倉海浜院ホテル」として全面的にリニューアルされた。

ホテルの外観はイギリス中世のカントリーハウスの表情を持ち、太い木柱と白い化粧漆喰を施した外観デザインは、我が国屈指のリゾートホテルとしての建築デザイン美を誇っていた。ジョサイア・コンドルは日本人の妻を娶り、東大で建築学の教鞭を執っていたが、その傍ら鹿鳴館やニコライ堂、各国大使館、教会、三菱グループの総帥、岩崎弥太郎邸の建築設計なども手がけている。

(5) 磯野長蔵の革新的アイデア

大正9年(1920)、明治屋の社長、磯野長蔵がこのホテルを買収することを決意し、「鎌倉海濱ホテル」と名を改め、さらに大幅な改修が施された。

ホテル支配人やチーフシェフには外国人を登用し、テーブルに供されるメインディッシュやスイーツは好評を博していた。さながら大正モダンを地で行くように、ダンスパーティからバレエ教室まで、多彩なイベントが提供されて、ハイスocietyな人脈が集うサロンとなっていく。

ホテルには海水浴客のために温水シャワーが常備されていたし、玄関ロビーには、常に2台の送迎用自動車が配備され、客待ちの人力車も控えていた。芝生が敷き詰められた庭園には4台のパーゴラが置かれていて、カフェを楽しむ人やガーデンパーティにも供用されていた。滞在者も来訪者も、松籟の中で、このホテルでの滞在を心ゆくまで味わっていたという。サービスの質も、またサロンとしての雰囲気も、このホテルは往時の日本の近代化のシンボルとして輝いていた。

(6) 戦後のホテル焼失

我が国は、不幸なことに第2次世界大戦の敗戦により、多くの人命と国土の焼失崩壊、疲弊を招来してしまった。しかし幸いにも、鎌倉は甚大な戦禍に遭遇せずに、鎌倉海濱ホテルも戦災を免れることができた。

しかし戦後は米軍の管理下に置かれてしまい、将校クラブとしての供用を余儀なくされていた。鉄条網が四囲に張り巡らされてMPが歩哨をするという有り様で、周辺の人々も近くに寄ることは禁じられていた。

あまつさえ昭和20年12月と翌年正月に、滞在する米兵の酔った上での不始末と報道されたが、2度の不慮の火災によりホテルは全焼失してしまった。夜空にけたたましい半鐘が響き渡り、幾台もの消防車のサイレンと半鐘が怯えるほど鳴り響いていたが、結局この瀟灑なホテルは跡形もなくなってしまった。近在の悪童達は、誰かが火をつけたに違いないと囁きあっていた。

2 鎌倉にとっての由比ヶ浜・相模湾

(1) 鶴岡八幡宮・段葛と由比ヶ浜

1で記した通り、鶴岡八幡宮から段葛を中心とした所謂「旧鎌倉地区」においては、南に相模湾、東-北-西を山々に囲まれた一帯を指すものとして受容なファクターとなっている。頼朝は、鎌倉の都市建設に当たり京の都から陰陽師や多数の宮大工を呼び寄せたそうである。京の都の中心は大内裏であり、鎌倉の中心を幕府をつかさどる源氏の氏神、鶴岡八幡宮としたが、これは京の都の大内裏に相当する。そして、大内裏に直結する朱雀大路は、鎌倉最長にして最大の直線通路・若宮大路(段葛)に他ならない。そして都を囲む周囲は、盆地である京の都における北山、西山、東山、そしてかつて南に位置していた巨椋池に相当するものを鎌倉では源氏山や相模湾とし、四神相応の地として見立てたのではないかと考える。

かつて西の稲村ヶ崎から逗子海岸までの海岸線は、鶴岡八幡宮の正面という意の「前浜」と呼ばれていたのもうなずける。

つまり、中世都市鎌倉の根幹は、由比ヶ浜を起点とし、段葛～鶴岡八幡宮と連なる直線であると言える。

(2) 頼朝以前（鎌倉郡衙、由比八幡、源義朝の館）

鎌倉は武家政権の象徴として歴史の表舞台に立つことになる以前から要衝の地であったという点に驚かれるであろうか。Iで触れたように、奈良時代の郡衙の遺構やその近くに頼朝の父義朝の館（現寿福寺周辺）があったとの記録、さらには、鶴岡八幡宮の祭神が元あった由比若宮の存在である。1063年に頼朝の祖先・源頼義が創建した神社であり、頼義が「前九年の役」で安倍氏討伐のために東北へ赴く際、京都にある石清水八幡宮に勝利を祈願した。戦に勝利した頼義は、感謝の意を込めて祭神を鎌倉へと勧請するために由比若宮を建て、これを源氏の守り神としたものだ。

(3) 異聞の検証

由比若宮が河内（清和）源氏の守り神だとすれば、由比ヶ浜は、正に源氏揺籃の地であると同時に礎であるといえる。面白いことに、由比若宮から段葛と並行して線を引いてみると、北条宗家屋敷（宝戒寺）、頼朝の墓、覚園寺、そしてかつての鎌倉幕府最初の政所であった大倉幕府跡地がその線上に位置する。そしてさらに驚くことに、段葛を中心として、その西側には郡衙の遺構と義朝の館跡を結ぶと、段葛を挟み東の結若宮と等間隔のもう一つのラインが浮かび上がってくる。そしてその西のラインの南端に「この土地」はある…。

3 なぜ由比ヶ浜の「この土地」が特別であるのか

上記の検証が事実なら、「この土地」は、「西のラインの一の鳥居」といえるのではないか。一見海沿いの空き地であるこの土地の、海浜ホテル焼失後の足取りと、直近10年の経過を辿ってみたい。

(1) ホテルが焼失した～その後

ホテルが焼失し、もはやその夢は潰えたかにみえた別荘文化は、戦後新たな展開を見せる。高度成長期の到来である。海水浴場の盛況、東京オリンピック開催、国道134号の開通（当時は有料道路）、ベッドタウンとしての宅地造成と人口増…日本は右肩上がりの発展に沸いていたが、その狂乱を横目に見つつ、この土地は静寂を保っていた、ホテルは再建されなかったのだ。1977年、わずかに残った松林をのこし、テニスコートとして再度利用されるようになる。周囲近郊の宅地化は進んでいたが、東側は「鎌倉海浜公園由比ガ浜地区」として保全されるなど、白砂青松の代名詞であったかつての風情はかろうじて残されていた。しかし、2010年にはテニスコートも閉鎖される。

(2) 商業施設計画と挫折

この土地に商業施設の建設計画が持ち上がったのは2014年2月事業計画は、建物地上2F・面積約1万㎡、屋上部分に約300台分の駐車場を設置するというものだった。しかし

計画が明らかになると、渋滞や住環境悪化の懸念から周辺住民を中心に見直しを求める声
が上がるようになり「交通渋滞などの問題に対し十分な対策がとられていない」として、由
比ヶ浜西自治会の有志らが「古都鎌倉を守る Think Yuigahama の会」を結成、「黒松の森の
復活と追憶の海浜ホテルの復刻」というテーマの代替案を作成しホームページで公開した。

このような動きに事業者側も計画の再考を迫られる形となり、いくつかの代替案が示され
たが、いずれも交通問題をはじめ周辺の環境悪化への根本的解決へはほど遠く、結果として、
2021 年非公式ながらも事業者から地元自治会へ「商業施設計画の中止と全体計画の見直し」
が伝えられた。

(3) Think Yuigahama の会の功績と今後

これらの一連の動きは、所謂開発反対運動とは異なり、地域住民が行政計画の枠を超え、
地域・延いては鎌倉の発展に貢献する土地利用についてヴィジョンを示したものであり、結
果その願う力が起こした奇跡と言える。

現在も土地の権利は依然事業者にあるなか、当然資金回収のため新たな計画を早々に示
してくるだろうことは想像に難くない。いつまでもこの状況が続くということはまずな
かろうと思われる。

Ⅲ この土地 由比ヶ浜～コンサートホールへの誘い

由比ヶ浜の歴史的シンボルは、すでに述べてきたように「温暖な海浜」と「黒松の林に佇
む瀟洒な鎌倉海浜ホテル」であった。さらに取えて加えるならば、鎌倉人のプロフィールと
は、「武士道と禅の精神」を拠り所にした質朴な気風、そして他者への思いやりの精神文化
を誇りにしている。我々の精神性を一言で表すとするならば、例え新たな建築であっても、
この地の歴史性と風情を破壊するものであってはならない、と言う強固なる決意である。

こうした視座から、以下に提言をまとめてみた。

1 土地の特性と土地利用の方向性

由比ヶ浜の海岸線に沿うようにして小田原から逗子、葉山方面に至る国道 134 号が走っ
ている。この国道に接して、当該地の南側に鎌倉市が所管する公園（海浜公園由比ヶ浜地区）
がある。本件のテーマとなる土地は、この公園に隣接した北側に位置している。

当地は先述したように 17,200 m²のフラットな地形で、その背後、北側には 134 号とほぼ
並行するように、古くからある海岸通りが東西に走っている。つまり当該地は国道 134 号
と旧海岸通りに挟まれていることになる（添付地図参照）。

海が気まぐれに荒れ狂うときには、海風と飛び砂が南から吹いてくることもある。これを
回避するには海風を遮蔽する人工的なフェンスではなく、古来からの生活の知恵が生んだ、
黒松の森の存在が望ましいと思われる。かつては周辺の個人宅にも黒松の植樹を多く見る
ことができたが、現在では世代交代もあり、宅造の細分化が進んだ結果、黒松の多くが伐採
されて、緑が著しく減少してしまった。こうした事実関係から、我々は当開発予定地を、溢
れる緑と清浄なビーチの総和が、単なるマンション居住区として開発されるのではなく、

「古の時代を彷彿とさせ、かつ現代的なニーズに合致した開発計画の実現」を強く願うものである。次にその具体案を提起してみたい。

2 海辺の森に佇む「コンサートホール」の建設

(1) 白砂青松～黒松林の復活

司馬遼太郎著の「街道をゆく」第29巻に海辺の森が詳しく描かれている。主人公は秋田・佐竹藩の御物書き、栗田定之丞である。栗田が日本海沿岸の浜田という村落の見張り番所に、ロシアなどの外国船の監視作業に派遣されることから物語は始まっている。派遣された浜田の村落は、長きにわたって日本海から吹き付けるおびただしい飛び砂に村民が苛まれていた。栗田はその惨状を見て一念発起をして、「砂留め役」を志願して、砂の飛来、その流れ方、時期別特性などを、砂浜に泊まり込んで精査をした。彼彼は先ず藁などを束にして砂に埋め込み、そこに柳の稚樹を植えた。さらに次の年にはグミとハマナスを植え込み、それらが育った7～8年後に、初めて黒松を植樹してこの段階的植樹システムを完成させたのである。現在では日本海沿岸の長さ14キロ、幅1キロにわたり、何と700万本の黒松が飛び砂を防ぎ、後背地の農業をはじめ、居住者に快適環境をもたらしているという。本県には沿岸の国道134号、茅ヶ崎から西方の大磯にかけて、海辺に黒松の林が幅広く存在し、その修景とオゾン排出は周辺の人々にもドライバーにも大いに歓迎されている。

由比ヶ浜にかつて存在していた黒松を、防砂としても修景としても役立てるために、本プロジェクトの用地の四囲に、栗田定之丞のように、鎌倉のシンボルツリーであった黒松の植栽を実現してみたいものである。

(2) この地にいかなる建築性を実現するか

これまで述べてきたこの土地の歴史性にふさわしい、同時に現代的な国民ニーズに応え、収益性を担保できる施設展開であることが第一条件であろう。

鎌倉市域には、およそ150余の神社仏閣が存在する。五山と称される大寺は建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄妙寺であり、さらに大仏を祀る高德院、長谷寺、覚音寺、瑞泉寺、明月院、鶴岡八幡宮、荏柄天神社などの境内はその多くが国指定の史跡であり、またいずれも古都保存法による指定区域となっている。

京都や奈良にある大寺院、神社のスケール観とは異なるもの、山あいには抱かれて、それぞれの寺社が由比ヶ浜を遠望する位置関係にある。鎌倉は南を由比ヶ浜に、そして北西、東の三方が山に囲まれている街である。京都や奈良の大寺院や大社とは異なり、北側にある後背地の小さな山あいには佇む風情ある寺社が圧倒的に多いことが特徴である。

このような背景と立地からすると、当該地の再開発には「鎌倉の持つ歴史性や佇まい」を十分に意識した建築性をもつべきであると考ええる。

ここで浮上してくるアイデアは、鉄筋とコンクリート、石材を多用する建造物ではないということであろう。

鎌倉は、コロナ禍時期を除けば、毎年およそ2000万人の来街者がある。市の人口は17

万人台であるものの、この来街者 2000 万人はマーケットソースとしては巨大で輝かしい数値である。交通アクセスは横須賀線の中核として、江ノ電、バス、自家用車による来街である。本テーマのロケーションである由比ヶ浜地区は、鎌倉駅からおよそ 1, 3 キロ、15 分程度の徒歩圏であり、鎌倉ないし藤沢方面から江ノ電を利用すれば、和田塚駅乃至由比ヶ浜駅から当地までは僅か徒歩数分でアクセスできる。現に若者世代は、その殆どが鎌倉駅から徒歩で海岸を目指している。しかも当該建設予定地は、海岸線よりもやや内陸側にあるため、利用者はいずれの鉄道駅からも徒歩圏にあると言って良いであろう。

さらに隣接地である鎌倉海浜公園の地下には国道 134 号地下駐車場を始め、周辺に複数の民間の駐車場があり、総計 300 台を超える駐車場施設がすでに備わっていると言っても良い。

さてここで本題を提起しておきたい。我々は当該予定地に、比較的小規模の、しかししかし音響設備に秀でており、かつ建築性、デザイン性に富んだ木造主体の「コンサートホール」の建設を意図したいと考える。このホールの目指す建築性は、鉄筋コンクリートではなく、ウッディなデザイン性溢れるものを目指すことと致したい。

建築計画を考えたときに、建物高さ 10m 以内の規制が掛かっているため、地下部分の掘り下げを行って、建築総容積を担保することが望ましい。

そして何よりも重要なポイントは、我が国の誇る木材を基幹素材として使用する、ということである。構造上必要な鉄筋鉄骨は、最小限度に留め、修景上、その形状を顕わにすることは避けたいものである。

(3) コンサートホールの規模

本案に於けるコンサートホールの客席規模は、敷地面積 17,200 m² と隣接する環境を意識するならば、およそ 300~400 席程度の、いわゆる小中規模のホールがふさわしいと考える。周辺は静謐な住宅街であり、特に用地の東側と西北側は住宅街が近接している。南側は市が管理する前述の公園であり、北側の一部は旧海岸通りに接している(図参照)。

周辺環境に配慮する為には、思い切った植栽の設定を優先課題とし、日照や風向、来場者のアクセスラインを理解したうえで、ガーデニングを実施したい。規模的には上記席数がほぼ妥当な規模ではないかと思料する。

ホールはあくまでも演奏会主体ではあるが、映写を可能にする大型(マルチ)スクリーンを付設し、また音楽以外のイベント、例えば入学式や卒業式、シンポジウム、各種セレモニーなどへも開放するものとしたい。ホールを構成する要素を以下に挙げておきたい。

- ・およそ 300 席の客席とフルオーケストラの演奏可能なステージ
- ・ギャラリー、多目的室
- ・チケットオフィス、事務室
- ・ロビー、ホワイエ
- ・レストラン・カフェ(コンサートなどが開催されない日、時間帯には一般に開放。基本的には専門業者への委託。前庭にもオープンカフェを設定)

- ・食材供給可能なオーガニック野菜等を栽培するエリア・ビニールハウス
- ・練習・録音スタジオ、映写室、工房室
- ・管理室、スクリーン
- ・附帯宿泊機能を有する建物(15~20室程度。シングルルーム主体で出演者・関係者優先)
- ・駐車場(出演者・関係者優先) 基本的には地下駐車場としたい。

コンサートホール発想の建築性から、少なくとも外装は木材主体を想定しておき、鉄筋鉄骨を使う場合は、見えがかり上、露出せずに構成、使用したい。但し当地に於ける建築基準、防災基準は厳しいため、市当局の指導を事前に経て解決を図りたい。

我が国をはじめ、各国の小ホールを逍遙していくと、それぞれがその国、その地域の特産品としての木材を多く使っていることが見えてくる。

(4) コンサートホールのイメージ

コンサートホールの建築性我が国の木造主体のコンサートホールは東京藝術大学奏楽堂、ヤマハホール、桐朋学園宗次ホール、八ヶ岳高原音楽堂などが高評価されているが、我が国のみならず各国にも存在している。建築設計に当たっては、そのコンセプトを明示した上でコンペティションを実施したいと思われる。美観や使い勝手のみに拠らずに、防災や周辺環境との親和性を尊重して、内外の設計家に委託し、実施することが望ましい。建築についても同様に、経験のあるゼネコン数社にコンペを実施することが肝要である。

本コンサートホールの規模は、建設用地がおよそ17,200㎡であるため、容積率などに関して、県ないし鎌倉市との協議マターになると思われる。当地の都市計画用途は第2種住居地域である他、第3種風致地区であり、建物高10m、建ぺい率40%、容積率200%、緑化率20%である。この諸条件を意識しつつ、とりわけ音響設計、即ち音の響き、拡がり、伝わり方を十分に計算して、以下の方法論にて本案を具体化していきたいと考える。

本コンサートホールはあくまでも音楽等文化的イベントを核として運営されるという前提で論を進めたい。

我が国に於ける木造建築の最たる存在は神社仏閣である。これらの建築性を見ると、例えば清水寺の基礎材は檜が主に使われているし、法隆寺のそれは檜である。また白川郷では栗が多く使われている。その他大型建築に使用されている樹種は落葉松、杉、ヒバ、サワラ、桐などを見ることができる。部分的には近年精度が上がってきている集成材使用も考えられる。エコロジカルな木材を使用するメリットは、耳障りな音を和らげ、低周波音を輝かせることが可能となることにある。また素材自体が温湿度を適度にコントロールすることもでき、彼の土地及びその周辺の歴史風土とのマッチングを果たすことができるだろう。

3 鎌倉の音楽・文化芸術事情

(1) 鎌倉には、所謂優れた音楽ホールがないこと

鎌倉市には大船の旧松竹撮影所跡地周辺に「鎌倉芸術館」(1500席)が存在するが、高い評価を得ているとは言い難い。大ホールは演劇を想定した設計であり、フルオーケストラで

の演奏の際、非常に響きがちぐはぐとなる等音響面での難点は致命的ですらある。併設の小ホール（600席）はこのような問題はないものの特筆すべき点はない。加えて楽屋が非常に使いづらい。さらに、昨年従前からの指定管理者が経営難で離脱し、経営上も非常に厳しいことが明らかとなった。

鎌倉駅前には、鎌倉生涯学習センター（中央公民館）のホール（286席）がある。アクセスがよく音響も優れているが、ステージにフルオーケストラが乗れないため、使用の可能性が非常に限定される残念な施設である。

（2）集い発信できる主軸となる文化施設・センターがないこと

鎌倉には、数多くの著名な音楽家・芸術家が居住（その卵やアマチュアは数知れず）しているが、鎌倉での活動は非常に限定的であり、かつ各々の活動は連携しておらず、鎌倉は単なるベッドタウンといっても過言ではない。

また、社寺仏閣や伝統芸能などの歴史的な文化は残っているものの、何れも単発でありネットワーク化されておらず、小規模なテーマパークの寄せ集めの印象はぬぐえない。

これは偏に（1）のような状況であることに加え、行政の文化芸術振興意識が低いことに起因する。文化都市鎌倉を標榜している割には非常にお粗末な状況だと言わざるを得ない。

（3）優れた文化施設の必要性

我々がコンサートホール建設を提言するのは、単なる思い付きではなく、このような背景・事情がある。

もし、素晴らしいホールがあれば、優れた芸術家が集い、そこから数多くの素晴らしい芸術が生まれ、さらに多くの芸術家が吸い寄せられ、そして質の高い芸術を求めてたくさんの人が集まる…、そして反対のベクトルを持つ集団は自ずと彼の地から遠ざかるであろう。そして、その素晴らしいホールが素晴らしい場所にあったなら…、想像するだけでもわくわくしないだろうか。

IV 結び

我々が敢えて新たに由比ヶ浜のこの土地に音の殿堂を創るべき、と言う提案を致したのは、ハード面においては、鎌倉の中心部で重要な要素として古より神聖視されていたと思しきこの地域に於いて、17,200㎡というフラットな底地はもう今後2度と出現しないこと、近接して市立の公園があり、また四季折々、雄大で美しい海の景観を眺望できること、そして、このような稀有な土地が奇跡的に今現在まで残っていること。

ソフト面では、伝統的な文化と近代、現代の要素が混ざり合った独特の文化圏を形成している環境に魅了された、プロアマを問わず優れた芸術家が多数居住しており、もし集うべき主軸、依代が出現した場合、それらは束ねられ新たな素晴らしい芸術が生み出される可能性があること。

由比ヶ浜の名前の由来は、多くのものを束ねる～「結」からきているという説がある。

優れた資質を魅了し束ねる「結（ゆい）」、それを由比ヶ浜のこの土地にぜひ。